252号
2020/4

日中文化交流市民サークル'わんりぃ'
町田市三輪緑山 2-18-19　寺西方
〒195-0055　☎：044-986-4195
http://wanli-san.com/
E メール:t_taizan@yahoo.co.jp2018/7/1

老画家：キャンパスに描かれたのが「牌坊」という建築物で日本の鳥居みたいなものです。それは、清王朝の初代皇帝ホンタイジご夫婦のお墓を囲む建築群の入り口の前にあります。撮影日は木曜日なので、おじいちゃんは日曜画家ではないことは間違いがないでしょう。

（2018 年 3 月遼寧省瀋陽、北陵公園　日中水墨協会会長＝満柏 撮影）

'わんりぃ' 2020 年 4 月号の目次は 20 ページにあります

「寺子屋・四字成語」雑感−31

yì bù róng cí

义不容辞（義不容辞=道義上断り切れない）

中国で見つけた“有名小学校入学準備の為の”絵本から　文と訳・有為楠(ういくす) 君代

今月の言葉は、日本の四字成語辞典でほとんど取り上げられていません。

・➢・➢・➢・➢・➢・

漢代末期、曹操(そうそう)は天子を擁して諸侯に号令をかけて、呉の孫権(そんけん)と蜀の劉備(りゅうび)に向けて攻撃を開始しました。赤壁の戦いで大敗を喫してからも、軍隊に休養を与えた後、曹操は再び自ら大軍を率いて南下して、呉の国を責めました。

孫権は臣下を集めて対策を相談しました。その中で計略家張昭(ちょうしょう)は、劉備の軍隊と連合して戦うべきだと考え、劉備に出兵するよう要請し、曹操に対して一緒に戦いました。それというのも、劉備は孫権の妹を妻として迎えており呉の国と姻戚関係にあるので、曹操は呉と蜀両国にとって共通の敵とみなされるからです。そして蜀が呉と連合して曹操と戦うことは、蜀（劉備）にとって当然引き受けるべきものだったのです。

挿絵 満柏氏

・➢・➢・➢・➢・➢・

言葉の意味：道義上断ることが出来ない、当然〜〜すべきである

使用例：家族を守り、国を守るのは、軍人にとって当然の任務である。

・➢・➢・➢・➢・➢・

この四字成語、日本語の「四字成語辞典」では見当たりません。意味はタイトルの括弧内に示したように、「道義的に見ると断り切れない」ということですが、日本語では短く適切に言うことが出来ないのでしょう。簡潔に言う慣用表現なども思いつきませんが、意味はとても良く分かりますね。

このお話は、明代の章回小説集「醒世恒言(せいせいこうげん)」に出て来るお話です。時代の状況は、上のお話の通りです。劉備は、共同で曹操を迎え討つ誘いに乗りましたが、それは軍師である諸葛亮(しょかつりょう)（孔明(こうめい)）が説いた「天下三分の計」を利するものだからなのだそうです。

ここからは、知識に乏しい筆者の独断と偏見による感想なのですが、少しお付き合いください。このお話で、私は呉の計略家張昭の論理にちょっと違和感を覚えました。劉備が孫権の姻戚だから、孫権の軍事行動に同調するのは当然だとするのは、中国のお話としては珍しいと感じます。

今から 2500 年程前の孔子の考え方を基に出来上がった儒教では、「仁」・「義」・「礼」・「智」・「信」という五つの徳目を修めれば、「父子」・「君臣」・「夫婦」・「長幼」・「朋友」などの人間関係が上手くいき、ひいては社会・国家の安定がもたらされると教えています。

「義」とは、利や欲にとらわれず、世の為人の為に行動することであると教えています。天に対して義を尽くす、つまり正義を貫くことなのです。しかし、日本に入ってきた儒教は、義の対象をグッと狭めて、主人とか、恩義を受けた人に忠義や義理を尽くすようにすべきと少々変形しました。

尽くす対象が絶対的な正義ではないので、恩義を感じる人が、私利私欲に目がくらんでいても、要求されれば、悪と知りつつ加担しなければならない時もあります。それで、日本古来の演芸や文学には、「義理と人情の板挟み」などというテーマが多いのでしょう。

このお話のように、姻戚関係があることを理由に加担を促すと言うのは、日本的感覚であり、中国的ではないように思います。この感覚は個人的なもので、取るに足らないものですが、それにしても、このような戦略的な話を幼稚園児に教えることに、何時も乍らの驚きを感じます。

日译诗词［漢詩の日本語訳］（1）

江南　漢代楽府

桜美林大学名誉教授　植田渥雄

植田先生に、従来の読み下しの漢詩とは違う、日本語による漢詩を、毎月ご紹介頂きます。ご期待ください。」

江(こう) 南(なん)

漢代楽府(かんだいがふ)

江南(こうなん)は　蓮(はす)摘(つ)むお里
蓮(はす)の葉(は)の　かくも麗(うるわ)し
蓮(はす)の葉陰(はかげ)に　魚(うお)は戯(たわむ)る
蓮(はす)の東(ひがし)に　魚(うお)戯(たわむ)れて
蓮(はす)の西(にし)にも　魚(うお)は戯(たわむ)る
蓮(はす)の南(みなみ)に　魚(うお)戯(たわむ)れて
蓮(はす)の北(きた)にも　魚(さかな)は戯(たわむ)る

楽府(がふ)とは、漢代に流行した民謡のことです。無類の芸能好きだった漢の武帝は、雅楽を制定したほか、各地の民族音楽を収集するための役所を作り、これを楽府(がふ)と称しました。後にここで演奏される歌舞音曲のことを楽府(がふ)と呼ぶようになり、魏晋南北朝時代には文人の間でも広く流行しました。さらに後世、メロディーが廃れたあとも、このスタイルに倣って作られた詩歌のことを〈楽府〉または〈楽府詩〉というようになりました。

今回取り上げた『江南』は楽府本来の姿を色濃く残したものです。この詩の背景は江南地方、長江下流域の南岸一帯です。漢代の頃は今と違って、この辺りは耕作に適さない一面の沼沢地でしたが、気候が温暖なため食用植物が多く自生していました。蓮もその一つです。蓮と言えば日本では蓮根(れんこん)が先ず思い浮かびますが、中国では根のほか、花も実も葉も昔から食用または薬用として重宝されてきました。

この詩は恐らく蓮の葉を採取する時に歌われたいわゆる労働歌の歌詞であったと思われます。メロディーが廃れた現代では当時の歌声を再現することはできませんが、おそらく日本の茶摘み歌のようなものであったと想像されます。

当時の蓮摘みは後世の茶摘みと同様、若い女性の仕事でした。この土地の娘たちは夏の終わりごろから初秋にかけて、一斉に繰り出して蓮摘みの仕事に励んだようです。

詩の中では専ら、みずみずしい蓮の葉の美しさを詠い込んでいますが、実際それは働く乙女たちの健気な姿を彷彿とさせます。では蓮の葉陰で群れ遊ぶ魚たちはというと、それは乙女たちを目当てに群がりよる青年男子の姿です。この時代、庶民の若者たちは互いにこのような歌をうたい交わしながら、労働の余暇の数少ないチャンスを捉えて結ばれていったものと思われます。

つまり労働歌は〈恋の歌〉でもあったわけです。

〔原詩〕

江(jiāng) 南(nán)

汉(hàn) 代(dài) 乐(yuè) 府(fǔ)

江(jiāng) 南(nán) 可(kě) 采(cǎi) 莲(lián)
莲(lián) 叶(yè) 何(hé) 田(tián) 田(tián)
鱼(yú) 戏(xì) 莲(lián) 叶(yè) 间(jiān)
鱼(yú) 戏(xì) 莲(lián) 叶(yè) 东(dōng)
鱼(yú) 戏(xì) 莲(lián) 叶(yè) 西(xī)
鱼(yú) 戏(xì) 莲(lián) 叶(yè) 南(nán)
鱼(yú) 戏(xì) 莲(lián) 叶(yè) 北(běi)

中原旅行記（1）2020年1月1～6日　　橋　詰　滋

1）今回の当初のコースの概要

１月２日に登場する西安と言えば、“わんりぃ”238号から241号まで、小生が寄稿した2018年９月の旅行記の最終旅行地でもあります。そのときは西安で、兵馬俑、始皇帝陵、華清池等の西安郊外を見物し、西安市内の観光はしていなかったので、今回は大雁塔などに行こうと企画しました。更に中国の古都巡りとして、洛陽、開封に足を伸ばす計画となりました。

2）１月１日　北京へ

11時半に、車で成田空港に向け出発となり、途中、東名高速、保土ヶ谷バイパス、首都高湾岸線、東関東自動車道を経て、道中渋滞に巻き込まれることなく、成田市内に14時に到着しました。搭乗機の出発時間が、18時15分であったため、暇を持て余し、成田空港近くのさくらの丘公園に寄りました。ここは成田空港から離陸する飛行機を間近に見ることができる名所であり、航空機好きの方や子連れの方にはお勧めのスポットです。この公園で、小一時間あまり飛行機の離陸シーンを見物しながら、時間を潰しました。その後、成田空港近くの駐車場で車を預けた後、空港まで移動しました。

正月のため、空港内は非常に混み合い、チェックインから出国審査まで１時間ほどを要しました。私の搭乗する便は搭乗口から離れた場所にあり(いわゆる「沖止め」)、バスで滑走路内を移動しなければなりませんが、そのバスがなかなか出発しません。バス車内で理由の説明がない状態で30分以上立ったまま、待たされた後、ようやくバスは出発し、10分あまりで搭乗便の前に到着しました。搭乗機に乗り込んだ後、機内で北京周辺の空が大混雑しているため、その調整のため出発が更に遅れるとの説明があり、19時15分に、１時間ほど遅れての出発となりました。

■日程表

1/1（水）	成田空港→北京空港（北京泊）
1/2（木）	北京空港→西安空港→大雁塔→陝西省博物館→青龍寺→城壁→鐘楼（西安泊）
1/3（金）	西安北駅→洛陽龍門駅(高速鉄道)→龍門石窟→香山寺→白園→白馬寺→麗景門（洛陽泊）
1/4（土）	洛陽龍門駅→開封北駅(高速鉄道)→龍亭公園→鉄塔公園→包公祠→開封府（開封泊）
1/5（日）	開封北駅→鄭州東駅(高速鉄道)→二七塔→商代遺跡→鄭州空港→北京空港（北京泊）
1/6（月）	北京空港→成田空港

北京には22時半頃に到着し、入国審査を経て、荷物を受け取り、両替した後、タクシーで北京空港近郊のホテルに移動しました。

中国でタクシーを利用するのは15年ぶりでしたが、以前と比べ、車内は綺麗になっており、ナビが装着されていて、スムーズに行くことができました。けれども、運転の荒さは以前とさほど変わらない状態であります。

23時半にホテルに到着し、すぐにシャワーを浴びて、24時過ぎに就寝しました。

3）１月２日　西安へ

６時過ぎに起床。このホテルでは朝食サービスが

今年の干支ネズミのオブジェと永定門の夜景

なく、８時にチェックアウトし、ホテルの送迎車にて北京空港へ移動しました。

西安行きの CA1209 便は 10 時過ぎに出発。出発後 10 分もしないうちに、眼下に万里の長城が現れ、更に天候状態が良いためか、はるか彼方まで続く様子をうかがい知ることができました。西安には 12 時 15 分に到着。１年３か月ぶりの西安です。ここの空港で 10 時間あまり缶詰にされたのも、今となっては良い思い出であります(詳細はわんりぃ 241 号にて)。今回の旅はここからの再スタートとなります。

ひとまず、空港から城際鉄道で西安北駅に移動し、１月３日の［西安北⇒洛陽龍門］、４日の［洛陽龍門⇒開封北］、５日の［開封北⇒鄭州東］の高鉄(新幹線)の切符を入手しました。日本にて予め、WEB で座席を予約しているため、窓口で予約番号を伝えれば発券できます。一昔前は、出発駅の窓口に並んで、横から乱入してくる順番を守らない人を押し退けて、入手しなければなりませんでしたが、今では、出発駅でなくとも、任意の駅で受け取りが可能になり、本当に便利になったものです。

切符入手後、地下鉄に乗って、北大街駅付近にあるホテルへ向かいました。しかし、ホテルでは予約をしたにも関わらず(予約表も提示)、「予約がない」と言われましたが、部屋が空いていることもあったため、無事にチェックインできました。予約をしていたとしても、きちんと予約がされていないことがあることを思い知らされました。この時点で 15 時です。まだ、昼食を取らず、観光もしていません。移動・切符の手配・ホテルのチェックインは意外と時間が掛かるものです。当初の予定では大雁塔⇒陝西省博物館⇒青龍寺⇒城壁⇒鐘楼の順で観光する予定でありましたが、そのうちいくつかを諦めるしかありません。

とりあえず、地下鉄に乗って、大雁塔に向かいます。大雁塔のある大慈恩寺の入場券は成人が 40 元であり、更にメインである大雁塔内に入場するために 20 元が必要です。大雁塔は 7 階建ての建物であり、655 年に建造されたものであります。7 階までエレベーターはなく、ひたすら階段で登るしかなく、日頃

ビャンビャン麺の看板

「ビャン」の表記
（ウィキペディアから）

の運動不足のためか、足腰が痛くなりましたが、最上階から眺めた西安市内の風景は、多少もやがかかっていたものの、絶景でした。

大雁塔を降り、その後大慈恩寺内の見物を終えたら、16 時半です。次に行く青龍寺の開園は 17 時までなので、青龍寺の見物を諦め、地下鉄で永定門まで移動し、城壁を見物することにしました。城壁の入場料は 54 元でありました。自転車を借り西安市内の城壁一周 13 キロあまりを移動することもできますが、時間的に余裕がありませんでしたので、永定門付近を散策するだけにしました。18 時過ぎにようやく日没となり、永定門ライトアップは綺麗でした。しかし、急激に寒くなったので、もう少しライトアップを見物したかったのですが、後ろ髪を引かれる思いで退散しました。

その後の予定は時間が遅く、入場ができないことから諦め、夕食としました。前回西安に来たときに、気になったビャンビャン面(漢字は上記写真参照)にしました。ビャンビャン面は山梨のほうとうよりも幅が広い麺であり、味はピリ辛です。辛い物好きの方にとっては、病みつきになります。

食後は散策をしながら、ホテルまで戻りました。足腰が疲れていたため、ホテルの部屋にあった足裏マッサージ機を使用しようとしましたが、微博による電子マネー決済でなければ利用できず、現金決済は不可です。どこまで便利になりつつあるのやら、ただし電子マネーを利用していない人にとっては、逆に不便になっていますね。

22 時過ぎに就寝しました。　　　　　　　（続く）

羅隠の『蜂』と鄭燮の『竹石』

報告：寺西俊英

今回は、羅隠の「蜂」と鄭燮の「竹石」という詩が取り上げられました。二人とも筆者には初耳の詩人です。植田先生の説明に沿って、まず羅隠の「蜂」からご紹介しましょう。

この詩は、日本では恐らく知っている人は少ないでしょうが、中国では小学校の教材としても取り上げられ、子供向けの CD でも童謡風の曲を付けて歌われているので、若い人ならだれでも知っているそうです。

羅隠（838 年～909 年）は、晩唐の詩人で銭唐（浙江省）の出身です。唐が滅亡への道を辿っていた時代を生きた人です。晩唐の出来事を見てみると、9 世紀の半ばころから藩鎮（地方の軍事組織）の統制が効かなくなり各地で乱が発生しはじめ、なかでも有名な黄巣の乱（875～884 年）は唐の国力を疲弊させました。そしてついに 907 年、節度使（地方の軍事と行政を司る長官）の朱全忠が自ら傀儡として立てた唐の哀帝李祝に譲位を迫り、300 年近く続いた一大王朝の滅亡に至りました。そのような世情の中で羅隠は科挙の試験を受け続けましたが、10 回挑戦してことごとく跳ね返されています。そのため不名誉なあだ名までついているのです。それは「十上不第」というものです。「上」は試験に臨むこと、「第」は及第の意味だそうです。つまり「不第」ですから及第できなかったわけです。10 回連続落第とは、文字通り不名誉な記録ですね。ただ当時は官僚の腐敗がひどく、付け届けや賄賂が横行していた時期なので、公正な試験が行われたかどうか、甚だ疑問です。そのような風潮を是としない彼は、たとえ実力があったとしても受からなかったでしょう。それにもめげずに挑戦し続けた愚直さを、むしろ誉めるべきでしょうか。

では詩を見て行きましょう。

fēng
蜂

luó yǐn
罗 隐

bù	lún	píng	dì	yǔ	shān	jiān
不	论	平	地	与	山	尖
wú	xiàn	fēng	guāng	jìn	bèi	zhān
无	限	风	光	尽	被	占
cǎi	dé	bǎi	huā	chéng	mì	hòu
采	得	百	花	成	蜜	后
wèi	shuí	xīn	kǔ	wèi	shuí	tián
为	谁	辛	苦	为	谁	甜

蜂

平地と山尖とを論ぜず
無限の風光尽く占めらる
百花を採りて蜜と成すの後
誰が為にか辛苦して誰が為にか甜き

最初の起句と承句は、「平地であろうと山の頂上であろうと、限りない風景を独り占めにする」という意味ですが、一見したところ詩の題名が「蜂」とあるため、蜜蜂が野山を自由に飛び回っている様子が目に浮かびます。実にのどかな山村風景です。

ところが転句と結句では一転して「その蜂は一体誰の為に苦労して、誰に良い思い思いをさせる為に蜜を集めているのだろう」と、蜂たちの苦労に疑問を投げかけています。特に結句には「彼らをこんな目にあわせている張本人は、果たして誰なのか」という言外の疑問が込められています。

最後まで読み進むと、この作品の裏に寓意が隠されていることに気づかされます。そしてこの寓意をどう読み取るかは、読者に委ねられています。

これについて植田先生は、「これは農民が平地や山畑を問わず朝から晩まであくせく働いてい

るさまを彷彿とさせますね。彼らは一体誰のために働いているのでしょうか。そこに思い至ると、実はこの詩は蜂のことを詠っているのではないことが分かってきます。農民を思いやる気持ちと共に、彼らの成果を吸い上げてしまう支配階級に対して、それとなく批判の矢を向けているのですね。まさに蜂の一刺しです」と解説されました。

さらに「このような詩を風諭詩といいます。中国最古の詩集『詩経』や、中唐を代表する詩人白居易の作品等にもみられるもので、中国では伝統的な詩風の一つになっています」とも。

言われてみれば、なるほどこの詩はとても風刺のきいた詩ですね。さらに「手法としては一般の伝統詩には見られない、とても洗練された印象を受けます。まるでイソップの寓話を読むような気分にさせてくれますね。一方、ひたすら蜜を集める蜂が一体何を指しているのか、この作品が風刺している対象が何かについては明言していないので、この点については議論のあるところかもしれませんが、そこがこの詩の面白い所です。どんな正解を導き出すかはすべて読者の心に委ねられているのです。小学生たちはこの詩を読むことで、小動物たちに同情し、更にはその生態に関心を寄せるようになるかもかもしれません。あるいは労働の意味を考えるきっかけとするかもしれません。中にはこの詩から、動物たちの無償の愛を感じ取る子供たちも出てくるかもしれません。この詩の受け止め方としては、それはそれですべてが正解なのです。名作とはこのような詩のことをいうのでしょうね。中国語に〈回味無窮〉という成語がありますが、この成語のように味わいが尽きない詩ですね」とも。

我々は先生の丁寧な解説により、深く理解することが出来ましたが、確かに名作だと感じ入った次第です。

なお、植田先生から「2句目の『占』の文字は、①占める（第四声）と、②占う（第一声）の二つの意味があり、アルファベット表記は同じzhanですが声調によって意味が異なります。この詩の意味からすると①の「占める」ですが、平仄の決まりで平声にする必要があるため、第一声で表示してあります。中国では一般に第四声で読んでいるようですが、現代音に従うとすればそれでもかまいません。また「论（論）」lunにも第二声と第四声両様の読み方があり、現代中国音では一般に第四声に読みますが、平仄の決まりに従って第二声に表記しました」とのお話がありました。

次に鄭燮（ていしょう）（1693年～1765年）の「竹石（ちくせき）」の詩を見てみましょう。鄭燮もあまり知られていない名前です。字（あざな）は克柔（こくじゅう）、号は板橋（ばんきょう）です。先生は、この人物について「鄭板橋と言えば知っている人が多いかと思います。日本でも有名な書画の大家です。清の乾隆帝時代の人で、江蘇省の出身です。貧困に苦しみ、44歳でやっと進士に合格しました。晩年を揚州で過ごした、いわゆる『揚州八怪』の一人です。竹の絵を最も得意とした文人ですが、絵が上手で書が得意。詩も素晴らしいと三拍子揃った人です」と説明されました。この人物は、優しい人柄ですが意思は強く、ブレない人でした。地方官時代、飢饉に際し上官に逆らって穀倉を開いて罪に問われ、免官になったというエピソードもあります。また民話や童話の主人公としてもしばしば登場します。

では、詩を見てみましょう。

zhú shí
竹 石

zhèng xiè
郑 燮

yǎo dìng qīng shān bú fàng sōng
咬 定 青 山 不 放 松
lì gēn yuán zài pò yán zhōng
立 根 原 在 破 岩 中
qiān mó wàn jī huán jiān jìn
千 磨 万 击 还 坚 劲
rèn ěr dōng xī nán běi fēng
任 尔 东 西 南 北 风

竹石（ちくせき）

青山（せいざん）を咬（か）み定めて放鬆（ほうしょう）せず

根を立つる原（もと）は破岩（はがん）の中に在り

千磨万撃（せんまばんげき）するも還（ま）た堅勁（けんけい）にして

任爾（さもあらばあれ）東西南北（とうざいなんぼく）の風

まず言葉の意味から入りましょう。この詩は題名にあるように竹を詠んだ詩です。一句目の「咬定」はガッチリと噛みしめることです。「放鬆」はゆるめることです。簡体字では「放松」と書きますね。「破岩」とは岩の割れ目のことです。つまり一、二句目で、岩の割れ目を噛みしめるように力強く根を張った竹の姿が目に浮かびます。三句目の「千磨万撃」は何千回何万回と擦られても撃たれても、つまり常に風雨に曝されても……の意となります。「堅勁」とは強靭なとか挫けないという意味です。四句目の「任爾」は、「さもあらばあれ」と訓読します。「あなたが何をしようとかまわない」「勝手にしろ」という意味です。

「『竹』はがっちりと山を掴み、緩めることをしない。その根は岩の割れ目に深く食い込んでいる。風雨に曝されても一向に動じない。風よ！東西南北どちらからでも吹くがよい」と、この詩の大意はこのようになります。

自分もこの竹のように生きたいという作者の強い意志を感じますね。この詩も題名の「竹」が詩の中のどこにも出てきません。しかし詩人の訴えたいことはよくわかります。

今回取り上げていただいた二首は、味わい深く意味の深い詩でした。二人とも弱い立場の人、庶民のために自分の意志を貫いた詩人でした。

先に鄭燮は「揚州八怪」の一人と紹介しましたが、揚州八怪とは何でしょう？ これは清朝の第4代皇帝乾隆帝（1711年～1799年）の時代に活躍した揚州を代表する書画作家たちのことを言います。「八怪」という名の如く、一風変わった個性の持ち主が８人いたと思われますが、その中身については諸説があって、必ずしも８人ではないようです。「八怪」そのものに「化け物」という意味があるので、「八」の字はあるいはそこから来たのかもしれません。

当時の書画の世界では技巧に走る傾向が顕著になり、いわばマンネリ化の弊害が表れていました。一方でそれに反発する動きも出ていました。

そうした流れの中で揚州の一派は自由奔放な画風、個性的な書風で新風を巻き起こしたのです。なぜ「怪」の字を当てられたかというと、当時の伝統的な画法に比べ、一見常識はずれの奇異な画法を用いたからです。それは技巧よりも高度な精神性を求める気風です。書体にもそれぞれ際立った特徴が見られます。

「怪」はもともと「醜」の類義語で、非難の意が込められていました。それが後に画壇でも個性派として認められるようになりました。しかしごく最近まで「扬（揚）州八怪」yángzhōubāguài と聞いただけで「丑（醜）八怪」ch ǒ ubāguài（醜い化け物）を連想し、顔をしかめる人がいたそうです。

彼らは花鳥画に優れ、四君子と呼ばれる「梅」「蘭」「竹」「菊」を好んで描きました。四君子の中の「竹」は「節操」を表し、真っすぐに伸びる姿は「純粋で正直な品格」、その強さを支える節は「屈しない節操」、中の空洞は「謙虚な精神」に例えられています。因みに梅は「高潔」、蘭は「清逸」、菊は「淡泊」を表すそうです。この４種類の植物が君子のような品格を持っていると、当時の人達は考えたのでしょう。

この詩を教えていただいた後、鄭板橋の竹の絵を何点か見ましたが、やはり品格を備えた素晴らしい絵画でした。

海外出張の思い出（ナイジェリア編⑪）

高島敬明

コンボイは、我々が完成させた石油精製工場のあるカドナに近づいて来ました。海辺にあるラゴスを出て約３週間、ポートハコートでコンボイを組んでから 10 日間でようやく到着しました。ラゴスから来た重量トレーラーは三々五々帰って行きました。無事に引き渡しが終わってやっとのことでまともな食事をいただきました。本当にホッとしました。

仲間達も夜には集まってきて歓迎会になりました。と言っても人数は以前と違って随分少なくなりましたし、作業員も全く違った職種の方たちが入っていました。工場の立ち上げ運転要員です。ナイジェリア人達にも教育しなければなりませんので、多くのナイジェリアのエリート達が日本人に従って勉強していました。約 1 年前の死亡事故でお世話になった方々も大半帰国されていましたが、日本人医師は同じ先生が頑張っていました。ここアフリカでの勤務を希望する医師は皆無なのだそうです。我々も二度と来ることは無いと思われるこの工場からおさらばする時がやって来ました。プロジェクトマネージャーは不在でしたので、事務所に挨拶し出発することにしました。帰りは乗用車２台、4ｔ車２台です。危険なこともあるので４台は寄り添うように 1000km を猛スピードで帰って来ました。

ちょうど 1 年間のアフリカでの仕事でしたが、大方作業は終わり住人の居なくなったコンテナハウスの清掃とか、身近な仕事ばかりになりました。あとは仕事の実力を付けた現地の業者に任せて帰国することになりました。帰国前のある日大きなバスで、残っていた作業員、ガーナからのハウスキーパー4名、運転手のエマニエル大尉、マイケル軍曹全員でお土産の買い出しに行きました。

高級ホテルの前の大きな樹の下の我々が名付けた「アンダーツリーマーケット」を目指しました。革製品は買わないほうが良いということで、象牙の人形、黒檀の人形、飾り物を少しだけ買いました。帰りのアムステルダムではダイヤモンドの加工工場の見学と買物が入っていたからです。

NNPC カドナ製油所（千代田化工建設の HP から）

●帰国の途へ

いよいよ帰国日程が具体的になってきました。キャンプのエンジニアを除く当社の 5 人と他社の作業員 3 人それに私を加えて 9 人の編成です。残留組は、また帰国が延びたメカニシャンの O さん、それにカドナから日本へ返されるクレーンやブルドーザー等の建機の運転ができる班長 2 名の当社は計 3 名が残ることになり、キャンプは10名そこそこになります。

O さんは、もう 4 年になろうとしていますが快く残ってくれたようです。9 名は私が世話役として帰国しますが、旅程は来るときに体験していますので帰りは皆さん安心していました。バービーチの事務所に全員で挨拶をしに行きました。エマニエルは黄熱病にかかっていますのでしきりに作業員に薬をくれとせがんでいます。帰国した作業員が残した風邪薬、正露丸、栄養剤、中には仁丹も与えていました。

帰国当日になりました。肝硬変の H マネージャーが皆さんいいな、と心底羨ましそうに話しました。ガーナからの 4 人組、非常にまじめな小柄な少年達も心から辛そうに見送ってくれました。エマニエル、マイケルも最後の仕事です。事務所の渡航手続きの事務員と 10 名で空港に向かいました。

空港の端っこにいつものように中型の旅客機が人目を避ける様に止まっています。エンジンの噴射を

見ると、いつもエンジンをかけたままのようです。エマニエルの説明では、「オバサンジョ大統領」が何か政変でもあるとこの飛行機で国外に逃亡するために何時もエンジンをかけたまま待機させているのだそうです。革命を起こし政権を取った軍事政権を国民は信用できないのでしょう。

作業員を先頭に搭乗手続きも済ませ、出国審査を通過しています。最後に私となりました。女性の検査官でした。英語でペラペラ話していますが、英語はわからないと相手にしませんでした。私の態度が悪かったのでしょうか！ 身振りで立つように言っています。ベルトの下の胴巻きには作業員から預かった大金が入っています。片言で英語は話せない、分からない、と繰り返すばかりです。ベルトを外せと言っているのですが、すったもんだと時間だけが過ぎて行きます。最初にダッシュ（チップ）を出しておけばよかったのですが、作業員がスムーズに通過したものですから、渡すタイミングが分からなかったのです。私は、頑として英語は分からないと話すばかりです。出発時間が迫ってきます。そこにオランダのKLMの機長が入って来ました。乗客が1名いないわけですから探しに来たのでしょう。女性検査官に物凄い剣幕で早口の英語で機関銃のように怒鳴り続けました。女性は仕方ないというような仕草をして、無罪放免です。機内に入ると乗客の注目の的で恥ずかしかったのですが、作業員は何が何だか分からなかったようです。いつの間にか私が見えなくなったのですから。

オランダのアムステルダム空港に到着し、ホッとしていると、わが社のオランダ駐在員が迎えてくれました。その時は分からなかったのですが、話の途中から入社同期のO君と分かりました。みすぼらしい真っ黒な顔を見てか「お前も苦労しているんだな。」と同情の言葉をかけてくれたのには参ってしまいました。苦労とは思っていませんでしたので。

一流のホテルに泊まることになり、「何が食べたい？」と言うので、寿司と天ぷらを嫌と言うほど食べさせてもらいました。翌日はオランダのあの有名な運河を船に乗って、その後ダイヤモンドの工房に見学と買物に行きました。安いと言っても我々からすればやはり高価なものです。銀行のカードなんか無かった時代ですから日本から持ってきた少々のお金と、アフリカでコツコツ貯めた日当のお金、私も作業員も皆同じです。苦労を掛けた奥さんにできるだけ大きなダイヤを買おうと必死でした。私は、ダイヤの中で傷がある、と言われた比較的大きめのダイヤを購入しました。全員が、今の日本人としては恥ずかしいような小さな小さな、ケースだけは立派なダイヤを買って奥さんへの想いを馳せたのです。またゴッホ美術館にも行きました。有名な自画像、あまりに小さな絵でびっくりしました。

翌日にはアンカレッジ経由で日本に向けて出発です。20時間近くかかりますが、心はもう浮き浮きして日本に帰った気分でした。成田に降り立った時は胸がいっぱいになりました。まず本社に行って挨拶回りをこなし、一日遅れで名古屋に到着しました。会社では誰の迎えもなく、私の前任の上司が病気も治り元気な姿で、すまなそうな顔をして出迎えてくれました。夕方遅くなって帰宅して家内と娘に会いましたが、心底嬉しそうにしてくれて私の苦労も報われたような気がしました。お土産とお話で夜が更けるのも忘れて話し込みました。

オランダで購入したダイヤの指輪は家内は一度も指に付けなかったようです。見たこともありませんでした。69歳で家内は亡くなりましたが、その数年前に結婚指輪も入った宝石箱の数少ない宝石の中からオランダの指輪を取り出して、「お父さん、台が大きくて古めかしいから私は出来なかったけど、ダイヤだけ取ってネックレスにして娘に渡して欲しい」と言われました。それだけ小さな小さなダイヤだったのです。

今でも思いますが、ナイジェリアでの海外出張は、アフリカ赤道直下で毎日が生死をかけた仕事でした。今の人はあのような環境ではおそらく働かないでしょう。でも私は仲間も上司も皆素晴らしい人たちに恵まれ、家族の協力があってこの仕事をやりとげました。現在グーグルマップで探しますと、アフリカのカドナに今の立派な石油精製工場が見られます。これを見ながら自分で納得して含み笑いをしています。（完）

退職ジャンボ機長の回想⑤　貨物機に乗務　柳田秀明

国際線を飛び始めてしばらくすると貨物機ばかりに乗務するようになりました。当時の航空貨物は主にビデオデッキやビデオカメラなどでした。オイルショック後アメリカやヨーロッパへの貨物便は、アンカレッジより更に 400 キロ北のフェアバンクス空港を給油地にしていました。ここにはジェット燃料が十分に有ったからです。北極圏に近いここは北緯 65 度に位置していて、冬季はとても寒く零下 40 度以下になることがよくありました。現在のジェット機には普通に装備されている小さな補助エンジンが DC8 型機には装備されていなかったので、ここで乗員交替と給油のため着陸後エンジンを切ると途端に機内がすぐに冷えてきました。外気が零下 40 度のときに降機して外に出る場合は、制服の上に支店が用意した防寒コートを着て、自分で用意した耳当てを着用し、手袋は二重にはめました。息をするときは口と鼻でゆっくりとします。口だけで息を吸うと喉を痛め空咳がすぐに出ます。鼻だけで呼吸すると鼻孔が凍るのを感じます。顔はピリピリとします。こんな中で燃料補給をして整備点検をする地上スタッフは本当に大変だったと思います。

貨物機では巡航中に航空機関士が機内食の準備をしてくれます。三人の食事は同時に食中毒にならないように別々のメニューが用意されていますが、私達の食事は毎回同じようなメニューで少しも美味しくありません。私達の機内食を作った人に試食してもらいたいほどです。こんなとき自分で用意したパックライスのお赤飯を温め、即席味噌汁を飲むと、とても美味しく感じました。牛乳に砂糖を加え、機内食保存用のドライアイスを砕いて入れるとアイスクリームもどきのデザートが簡単に作れます。味は想像してください。ときどきドライアイスが気化しきれず固形のドライアイスがアイスクリーム中に残っていることも有りました。溶けきらないドライアイスの粒は口の中で酸っぱい味がしました。決して試さないで下さい。

流氷が接岸しているアラスカの海を背に

航空機関士は私の食事を作ったりコーヒーを入れてくれたりパーサーの役もしました。

貨物機では、アメリカから日本へ生きている牛だけ運ぶフライトを何回か経験しました。牛を生きたまま輸入する方が、枝肉で輸入するより関税が安いと聞きました。貨物機の床におが屑のようなものを敷き、牛の糞尿にそなえます。操縦席のドアの後ろはすぐズドーンと貨物の空間です。ここに 40 頭以上の牛を一度に積みます。牛は数頭毎にロープの柵で区切られています。冬場でも牛の発汗は相当なもので操縦室の断熱が薄いところに結露し凍り付きます。成田に着陸のため降下すると凍結したものが溶けて頭の上にたれてきます。おしぼりを沢山用意して頭の上の水滴をふきながら操縦したこともありました。アメリカから日本に輸入するものがあまりないのか、季節により春はサクランボ、年末にはイチゴ、ときに“ひよこ”なども運びました。

DC8 型機を三年半乗務してから再度 B747 型機に移行しました。移行した時期がたまたま年末でしたので、人気のあるホノルル行きの臨時便が増発されて、まるひと月の間に成田とホノルルばかり 5 往復したこともありました。成田の離陸は夜なので徹夜のフライトになり、ホノルルで 1 泊して戻ると 1 泊 3 日の仕事になります。ホノルルとの時差は 5 時間ですがミニマムの休みで繰り返し乗務すると、昼間から時差の影響で眠くなり困り

ました。次第に飛ぶ路線も増えてきてロスアンゼルスや、サンフランシスコのほか、モスクワ経由ヨーロッパ線、アンカレッジ経由のヨーロッパ線にも乗務し始めました。こんなとき旧ソ連で1986年 4 月にチェルノブイリ原発事故が発生しました。この影響でモスクワ行きの飛行機には乗務員用にモスクワ滞在中に飲むための安全なミネラルウォターを会社が手配してくれました。フライト毎にミネラルウォターを沢山運びました。また当時のソ連は経済がめちゃくちゃで、ホテル内のキオスクの一部では、自国の通貨ルーブルでは買えずアメリカドルやドイツマルクなどの外貨でしか買えない有様でした。ソ連からルーブルの国外持ち出しは原則禁止でしたが、シンガポールでの交換率は 1 ドルが 5 ルーブル、モスクワでの公定交換率は 1 ドルが 0.7 ルーブルでした。モスクワでは町のスーパーの商品棚には商品は殆ど空っぽで干鱈や缶詰ばかりでした。そのほかモスクワで驚いたのは地下鉄がとても地下深く走っており、理由は核戦争に備えてシェルターの役目をしているとのことでした。このような路線で乗務をしているとき、再びアンカレッジの駐在員に発令されました。1986 年 8 月から 1989 年 8 月まで 3 年間アンカレッジとヨーロッパの路線ばかり乗務し、行き先はロンドン、パリ、アムステルダム、デンマークのコペンハーゲン、ドイツのハンブルグ、フランクフルト等々です。

有る冬の日のフライトのことです。アンカレッジを離陸すると高緯度のためすぐに夜間飛行になります。皆さんの中には冬季にヨーロッパやニューヨークに行かれた方は機内からオーロラをご覧になった方もおられるでしょう。オーロラは高緯度で高度 9 万メートルから 13 万メートル位のところに発生すると言われています。ジェット機は 1 万メートル位のところを飛んでいるので、オーロラの光の中に飛び込むことはありません。オーロラの写真は、虹のように色の着いたものがありますが、殆どの場合は単一の淡黄緑色です。カーテンの幕のようなオーロラは、見ている間に形を変えながらひらひらと舞うこともあります。オーロラは毎フライト毎に必ず出現するとは限らないのですが、オーロラが出る頃は、殆どのお客様はお休みになっているので、オーロラが見えても機内放送はしません。しかし客室乗務員には飛行機の右または左にオーロラが見えていることは知らせます。お休みになっていないお客様がオーロラに興味があれば、ご覧いただけるようご案内するためです。カーテンのようなオーロラの下の部分が水平ではなく斜めになっていることもあり、オーロラを長く見ていると旋回をしていないのに、飛行機が傾いて飛んでいるように思えて気分が悪くなる事があります。こんなとき目を計器板の水平儀に移すと、正しく水平に飛んでいてほっとしました。オーロラが見えなくなると、冬の空は無数の星で埋めつくされています。満天の空には天の川が幾つも見えます。自分に星の知識が無いのがくやまれました。しょっちゅう流れ星も見ることが出来ます。静かな満天の星を見ていると宇宙の、長久の時間の流れの中に、自分はこの瞬間に操縦席にいてこの夜空を見ているのがとても不思議に感じました。この様な中でも 1 時間に一度くらいの間隔で管制センターに自機の位置通報を無線で行います。現在の通過地点、時刻、次の通過地点の予定時刻、現在の残存燃料、気温、風向風速等々です。この情報は会社の運航管理室にも伝わり、私達の飛行機が予定通り飛行しているかを地上でも把握します。いまでは通信衛星を利用してパイロットが無線で位置通報をしなくても位置通報が出来るようになりました。通常北極圏を飛行するフライトは成層圏を飛行するので殆ど揺れず快適です。

この時期、日本からヨーロッパに行くにはシベリア経由便もいくらかありましたが、飛行便数は制限されていたので、英国航空、ルフトハンザ航空、KLM オランダ航空、エアフランスなど他の航空会社も主にアンカレッジ経由でした。現在、アンカレッジ経由ヨーロッパ便は貨物機以外には無く、どの航空会社もシベリア上空を通って日本とヨーロッパを結んでいます。（続く）

川島芳子（愛新覚羅顕玗）─花と散った男装の麗人

和田 宏

さて、私が関心を持つのは李香蘭の知り合いでもあった“男装の麗人”、“東洋のマタ・ハリ”、“満州のジャンヌ・ダルク”などと呼ばれた川島芳子（愛新覚羅顕玗。aixinjiueluoxianyu 中国名：金璧輝 1907 年 5 月 24 日～1948 年 3 月 25 日享年 40）である。清朝の粛親王善耆と第 4 側室を母に第 14 王女として生まれた。日本が“五族協和”、“王道楽土”をプロパガンダにして捏造した満州国の皇帝に据えた清朝のラスト・エンペラー愛新覚羅溥儀とは、いとこ関係にある。

芳子は 6 歳の時に大陸浪人の川島浪速の養女となった。子供が無かった川島浪速は来日した娘に良雄と名付け、男として育てた。成長に伴い女として良子、芳子と名を変え女学校に進学させるが、馬に乗って学校に通うなど、男勝りの性格が受け入れられなかったのか、松本高女を退学。両親の死と浪速の暴行を切っ掛けに、女を捨てて断髪、男として生きる決心をし、兄の居た上海を訪ねた。1927 年 20 歳の時に、幼なじみのモンゴルの王族カンジュルジャブに乞われて結婚するが、3 年後離婚。運命的なことは 1930 年 10 月に特務機関員の田中隆吉陸軍中佐と上海で出会ったことだ。田中が素敵に見えたのだろう。田中は計算ずくだったのか、芳子を愛人にしてスパイに育てた。1932 年に溥儀を皇帝として日本が新京を国都に満州国独立を宣言した時、皇后の婉容は天津の日本租界にかくまわれており、婉容を脱出させる役割が芳子に与えられ、見事に成功する。その後も田中の指示で孫文の長男に接触して蒋介石の情報を収集。時には男装、時には清朝の王女、時にはダンスホールやクラブのホステスになりすまし、スパイ活動をした。1933 年、松村梢風が 26 歳の芳子を婦人公論に『男装の麗人』と題して発表したことと、翌年、初代水谷八重子主演で同名の劇が演じられると、芳子は一躍スター並みの有名人になった。1933 年は 13 歳の李香蘭が満州で歌手デビューしたその年である。

満洲国陸軍上将の軍服を着用（1933 年）

30 歳の芳子が天津市で中華料理店を経営していた 1937 年夏、17 歳の山口淑子と出会い、その時、芳子は『同じ“ヨシコ”だね、それじゃー、僕がお兄さんで、君は弟だ、可愛がってあげるよ！』と話しかけ、以後『ヨコちゃん、元気かい？』などと呼び掛けていたという。『ちょっと失礼。』と言って、服を撒くりあげ、持っていた注射器で太ももに鎮痛剤を注射したそうだ。芳子が『十五夜の娘』というタンゴ風の歌を、モンゴル語と日本語で、やけっぱちなドラ声で歌っている貴重な CD を私は持っている。

愛新覚羅顕玗は、日本軍国主義に利用された犠牲者であり、可哀想な人だ。幼くして長野県松本市の川島浪速の養女として日本に連れて来られ、日本で大きくなり、目立ちたがり屋だが、頭の回転の大変良い、人助けが好きな、気の強くて、それでいて突如、気の弱い娘のような気性の人だっ

た。終戦と同時に二人は、“奸漢”として国民党の中華民国政府に捕まった。李香蘭は、中国人のなのに、侵略してきた日本人を好きになる様な筋書きの映画に出るとは売国奴と言う訳である。殆どの中国人は、李香蘭を中国人か、少なくとも中国人と日本人の混血児だと信じていた。川島芳子は、養父の川島浪速が、養子縁組を口頭でしただけで、自分の娘であると言う戸籍に届け出を正式にしていなかったため、裁判中に父親・愛新覚羅善耆が中国人と判明し、1948 年 3 月 25 日に北京刑務所で銃殺された。

もしかしたら、満州で清朝の復辟成るかもしれないと言う淡い夢を抱きながら日本の軍国主義に協力し、最後は春風に吹かれた桜の花のように散った中国人・川島芳子（40）と、中国人女優になりすまし、あわや処刑されるかも知れないという死線を乗り越え、懸命に償いの旅を続け、天寿を全うした日本人・李香蘭（94）。嗚呼ー！ 運命のいたずらと言うには余りにも・・・。松本市の正麟寺には芳子も分骨埋葬されており、毎年 3 月 25 日の命日前後に慰霊の集いが行われている。戒名は、愛親璧臺妙芳大姉。芳子が作った 200 首の短歌（『真実の川島芳子～秘められたる二百首の詩歌』）の中で特に胸を打つものは、

♪ 國のためと誰も口にせどなぜ故に
　民のためとは口にせざるや

♪ 誰知るや夜明けくればこの涙をば
　花にかへして笑みてゐる身

芳子が銃殺された遺骸のポケットから紙切れが出て来た。女学生の頃から口ずさんでいた詩が書かれていた。『家あれど帰り得ず、涙あれども語り得ず、法あれども正しさを得ず、冤（エンーぬれぎぬ。うらみ。）あれども誰に訴えん』そして、芳子は獄中から秘書に遺言を伝えていた。『自分は人間（清朝一族とも日本人とも）と一緒に埋めてほしくない。かわいがっていた猿の福ちゃんや犬のポチは正直だ。福ちゃん、ポチといっしょに埋めてほしい』というものだった。どうぞ安らかにお眠りください。

天津市で料理店『東興楼』経営（1937 年）

関門連絡船上で（1939 年）

河南省或いは「中原」雑感―(1)

開封と『清明上河図』

村上　直樹

今から20年近く前、『世界週報』(時事通信社) という雑誌の2002年9月17日号に「地に落ちた名誉の挽回に努める河南省」と題する一文が掲載された (短期連載「莫邦富の中国経済ガイド」の最終回)。この短期連載の他の回は知らないし、その後単行本の形で出版されているかも分からない。内容は表題のとおりであるが、要するに当時、河南省、河南人あるいは河南省の製品に対する評判が (中国国内で) すこぶる悪く、「こうした状況を見て、多くの河南省出身者は黙っていられなくなり、名誉挽回のために行動を起こしつつある」というものである。

2005年9月5日、私はその河南省に北京西駅より12：47発97号九龍(香港)行きに乗って初めて訪れる機会を得た。21：00過ぎ鄭州駅着 (定刻より2時間遅れ)、宿泊地の開封 (かいほう) 市までは車で1時間ほど。その後今日までたびたび開封、鄭州をはじめとする河南省を訪れている (直近は昨2019年12月24−28日)。そこで、会報『わんりぃ』の誌上を借りて私が直接見聞きしたことなど、ここ15年間余りの河南省の変化を紹介しようと思う。

ところで、河南省はしばしば「中原」と呼ばれる。「逐鹿中原」、「問鼎中原」に見える「ちゅうげん」である。それは広義には黄河中流域を中心とした地域、すなわち現在の河南省の大部分、山西省の東南部、河北省の南部、山東省の西部、安徽省の北西部、および湖北省北部の一部から成る地域を指し、狭義には現在の河南省を指す。いずれにしても、この「中原」は7000年以上前、黄河文明を生み出した地域であり、春秋戦国時代から唐宋時代まで中国で (そして、おそらく世界で) 経済社会的に最も発展していた地域である。

にもかかわらず、近年、「中原」(河南省) が不当にも差別的な目で見られている。『解読　中原』(2002年、作家出版社) の著者である張向持氏、『河南人惹誰了』(2002年、海南出版社) の馬説氏といった河南出身者がそうした現状を「河南よ、どうしたんだ？」と嘆き、中原の奮起 (「中原崛起」) を盛んに促している、ということだ。

お土産用実物大レプリカから(筆者撮影)

さて、河南省 (中原) を紹介するに当たって、やはり初めに訪れた開封市から、そしてもう一篇別の文章から始めたい。その文章とは私が同地を訪れる３か月ほど前、2005年5月22日の米ニューヨーク・タイムズ紙に掲載されたニコラス・クリストフ (Nicholas D. Kristof) 氏による750語ほどの短い論説「中国、世界の首都―開封からニューヨークへ、栄光は雲か煙のようにはかないもの」(China, the World’s Capital：From Kaifeng to New York, glory is as ephemeral as smoke and clouds、世界之都・中国：従開封到紐約――輝煌如過眼雲煙) である。ニコラス・クリストフ氏と言えば紀思道の中国名を持ち、1988年から1993年までニューヨーク・タイムズ社の北京支局長を務めた当代きっての中国通として知られるジャーナリストである。1994年に同じくニューヨー

ク・タイムズ社の北京支局員であった妻シェリル・ウーダン（Sheryl Wudunn, 伍潔芳）氏と共に出版した名著 *CHINA WAKES*（伊藤正・伊藤由紀子訳『新中国人』1996 年、新潮社）他、多数の著作がある（なお、2 人はその後、同社の東京支局にも勤めている）。

この論説でクリストフ氏は次のように述べる。新しい千年紀を迎えて、ニューヨークは押すに押されぬ地球全体の首都であるが、ニューヨーク人はうぬぼれる前に、中国中部の崩れかった町、開封に目をやるべきであると。

都市の覇権など束の間のものに過ぎない。クリストフ氏によると紀元前2000年時点における世界で最も重要な都市はイラクのウル（古代メソポタミア)、紀元前 1500 年時点ではエジプトのテーベである。紀元前 1000 年になると、はっきりしないが、レバノンのサイダーかもしれない。紀元前 500 年ではペルシャのペルセポリス、西暦 1 年ではローマ、そして西暦 500 年になるとおそらく中国の長安、1000 年時点では開封、1500 年になるとイタリアのフローレンス、2000 年（つまり現在）はニューヨークとなる。そして 2500 年には上記のどこでもないであろう。

そして続ける。現在の開封は薄汚れて貧しい、省の首都ですらなく（河南省の首都は 1954 年に現在の鄭州市に移っている)、民間の飛行場もない小地方都市である。11 世紀、北宋の都だった当時は 100 万人以上の人口を抱えていた。因みに当時のロンドンの人口は 15,000 人ほど。

現在は北京の故宮博物院に所蔵されている 17 フィートの歴史的絵巻には当時の開封の賑わいと繁栄ぶりが描かれている。何百という人々が押し合いへし合い行きかっており、ラクダはシルクロードからの商品を運び、茶店や食堂が繁盛している。開封は世界中から人を引きつけ、多くのユダヤ人さえやってきた。

その開封が現在の体たらくである。そこには慢心、思い上がりがあった。おそらく中国全体がそうであったように。ニューヨークも開封の教訓に学ばなければ、やがてハドソン川の開封となる運命である。

この論説が書かれた 2005 年当時、ニューヨークはすでに「9.11」を経験していたし（2001 年)、中国が破竹の勢いで経済成長を続けていたことはここでは措くとしよう。いずれにしても、この文章は河南省でも大きな反響を呼んだようだ。たとえば、一週間余り後の 2005 年 5 月 31 日付『河南日報』には、この文章を巡るインターネット上の反響を伝える記事「開封よ、それでもあなたの歴史は財産です」が掲載された。そこには内外の開封出身者などから、（しぶしぶ）現在の開封の停滞を認めつつ、その復活を信じるといった意見が寄せられている。適切な政策をとりさえすれば「開封には希望が、河南には希望が、そして中国には希望がある！」クリストフ氏の叱咤激励（？）を受けて、それから 15 年余り、私が知る限りでも開封のそして河南省の発展（変化）は目覚ましいものがある。

ところで、氏の文章にある「17 フィートの歴史的絵巻」とは明記されていないものの、張択端による『清明上河図』を指す。当時の開封の様子を詳細・克明に描いたとされる同絵巻は、文章中にあるように現在、北京の故宮博物院に所蔵されており、残念ながら開封に何回足を運んでも実物にお目にかかることはできない。2006 年 6 月 1 日に見学した旧「開封市博物館」にも複製があるのみ。なお、「開封市博物館」は最近新築移転され、私も 2018 年 8 月 26 日に新館を覗いてみた。『清明上河図』の実物がないことは変わりがないものの、その規模、展示内容は旧館とは比べ物にならない。いったい最近の中国の博物館の巨大化、現代化は半端ではない。河南省ではないが、昨年(2019 年)の 8 月に見学した寧夏回族自治区銀川市にある「西夏博物館」、今年(2020 年)の 1 月 7 日に行く機会のあった「大連現代博物館」などどれもそうである。もっとも立体模型や CG など最新 IT 技術を多用した「見せ方」には違和感を覚える向きもいるかとは思うが（この点は日本の博物館についても当てはまるだろう)。

この絵巻は中国から門外不出だったが、2012 年 1 月 2 日から 2 月 19 日まで、日中国交正常化 40 周年および東京国立博物館 140 周年を記念して東京国立博物館で開催された『特別展　北京故宮博物院 200 選』で初めて国外に出展された。私は 1 月 11 日に行ってみた。東京国立博物館の正門から長蛇の列で会場（平成館）入り口に行きつくまでに 30 分、さらに『清明上河図』を見るまでに待ち時間 180 分の掲示が

あり、結局この日は『清明上河図』は諦め、それ以外（清朝の一級美術工芸品など）を見て、ショップでいくつかの関連グッズを買って帰った。

2 日後の 1 月 13 日に再挑戦。この日は 12:30 前に東京国立博物館に到着、会場に入ったのは 1:05 分、迷わず『清明上河図』の列に並んだものの、現物の前にたどり着いたのは 4:10 であった。その後は「立ち止まらないように！」という係員の声に押されてあっという間（5 メートルほどを歩くのにかかる時間）に通り過ぎてしまった。修復が施されているとのことで、思っていたより色鮮やかだったのを覚えている。

開封で『清明上河図』と言えば、テーマパーク「清明上河園」の存在が観光名所として内外に知られている。私も 2005 年最初に開封を訪れた際と、その後 2013 年 10 月 1 日（国慶節）に実際入ってみた。「虹橋」、「上善門」といった建築物をはじめ絵巻の中のさまざまな光景を再現しており、公園の従業員も皆、北宋時代の衣装を身につけている。当時の民俗風習を模した多彩な実演があるなど 1000 年前の歴史を学びながら大人から子供まで楽しめる趣向がたっぷりで、とくに国慶節の休日には内外から来た多くの観光客でにぎわっていた。

この「清明上河園」は開園から今年で 22 年になり、「清明上河図」という名画から作られたという意味で、中国の数あるテーマパークの中でも一枝独秀の存在である。最近中国では、さまざまな芸術分野に派生効果を持ち、極めて認知度が高く、市場化・商品化可能な文化的シンボルを指して文化 IP（Intellectural Property: 知的所有権）という言葉がよく用いられており、「清明上河園」の成功の秘訣は正に名画 IP を確立したことによるとされている。

同園内で夏場の夜、催される大型水上劇『大宋・東京夢華』は必見とされてる。私は残念ながら実演を見たことはないが、屋内で上演される関連した劇は 2 度ほど見る機会があった。1 度目は 2009 年 11 月 22 日である。この時は開封市東京芸術中心（センター）で上演された『清明上河・夢幻東京』を 168 元の入場券を買って鑑賞した。主役は張択端、宋の徽宗ら。『清明上河図』の成立を巡る架空の物語を軸に、雑技風の曲芸、群舞など、総勢 100 名ほどが繰り広げる絢爛豪華な舞台であった。しかし、この日一番驚いたのは観客の少なさ。ゆったりとした 5～600 席に観客はわずか 15～6 人！ 料金の一番高い席を予約したことを後悔したのだった。日曜日でこの観客数だが、毎晩上演が続くようで、採算度外視は間違いない。

なお、演目および劇場名に「東京」とあるのは、北宋時代開封は汴京（ベンケイ）あるいは東京（トウキョウではなくトウケイと読む）と呼ばれていたことに由来する。『清明上河図』が絵で示した当時の情景を文章で表しているのは孟元老『東京夢華録』（入矢義高・梅原郁による日本語版は平凡社の東洋文庫 1996 年）。現在の開封でも固有名詞の一部として「東京」をよく見る（「東京大飯店」もある）。

2 回目は 2013 年 12 月 11 日、新装なった同じ劇場で大型マルチメディア歌舞劇『千回大宋』を見た。今回は席の半分ほどは埋まっていた。大音響とめくるめく光線といった人工物と生身の人間や馬が混然一体となって繰り広げる文字通り壮大な絵巻物であった。なお、多くはないが、中国での公演鑑賞でいつも思うのは、終了後観客が拍手はするものの、実にあっさりしていることだ。この日もかなり盛り上がっていたにも関わらず、カーテンコールはほとんどなく、突然解散となったのだった。

さて、『清明上河図』を巡っては「清明上河学」という学問分野もある由。絵巻の芸術品としての価値に注目するだけではなく、歴史、文学、古代建築、橋梁、造船、民俗、医学、服飾といったさまざまな専門分野から絵巻が記録する宋代中国の現実を明らかにしようとする学問である。日本にもこの「清明上河学」に関わる多くの専門家がいるようだが、とりあえず中国語の入門書、周宝珠『「清明上河図」与清明上河学』1997 年、河南大学出版社が挙げられる。

そのほか、この絵巻の派生品としてやや変わったところでは 2006 年に史志有氏によって作曲された『中国音画 清明上河図』といったものもある。これは絵巻の代表的情景に 18 の曲（序曲と終曲を含む）をつけ、著名胡琴奏者宋飛を中心とした中国民族楽器音楽隊の演奏する 2 枚組 CD としてリリースされている。私もたまたま見つけたので買い求め、愛聴している。（次回につづく）

ラオス・山からだより――28 号

ラオス山の子ども文庫基金　安井清子

これまでに 1 本の線路も通っていなかったラオスに、今、鉄道の敷設工事が始まっています。中国の支援で中国とラオスを結ぶ高速鉄道が走ることになったのです。ゲオバトゥ村からはかけ離れた話で、村の人たちには何の影響も恩恵もないかもしれませんが、今、ラオスがこれまで以上の勢いでどんどん、経済至上の方向で、激変しつつあることだけは確かです。村から一番近い町、ノンヘートでも、新しい建物の建設が急増しています。ただ、その変化が、ラオスの一般の人々の内からの発展というわけではない…と言うところが、見ていて心苦しいところです。その変化に対応していく人もいますが、巻き込まれて潰されてしまうだけの人もいる、そんな流れの中で、私たちの「図書館」の役割はやっぱり大きいのではないか？…と思う、この頃です。

●となり村の中学校に、図書室を作りました

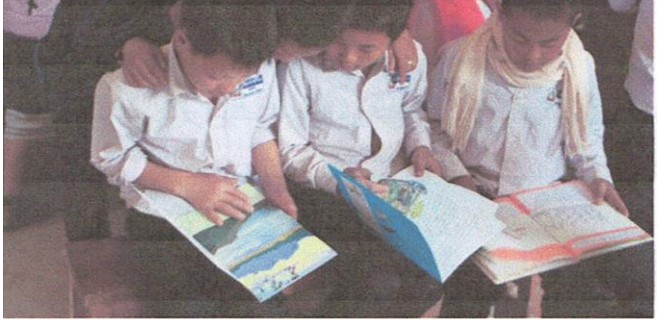
ゲオバトゥ村の更に奥の村、タムクート村に中学校があります。そこへ村の子どもたちも、さらにもっと山奥の村からも子どもたちが大勢通っています。3 月半ば、中学校に、ラオス山の子ども文庫基金も協力して、図書室を作りました。今回の活動は、「あらいふさきち教育奨励財団」という、磯部久美子さんという方が、ご自分の資金を投じラオスで作られた財団の支援に、「たろうの図書館」が協力しているものです。

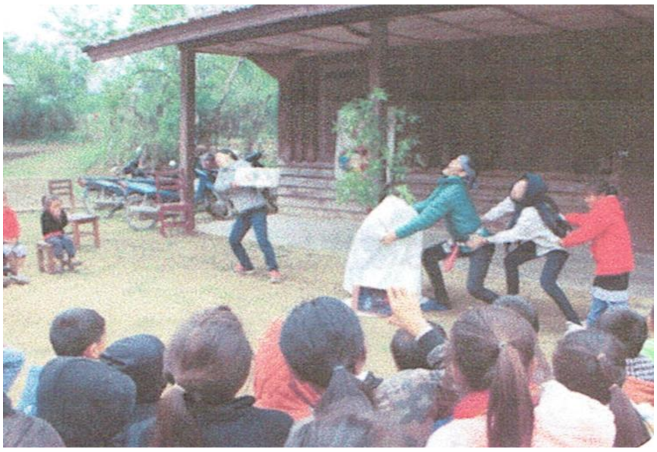
以前、24 号（2016 年 5 月）で報告しましたが、この中学校に、移動図書サービスを行ったことがありました。「たろうの図書館」の女性スタッフがバイクに本を積んで凸凹の山道を、中学校に図書サービスに通い、とても歓迎されましたが、なかなか大変だったこともあり、一学期だけで終わり、継続出来ませんでした。そこで今回、「あらいふさきち教育奨励財団」の資金で図書室を作る話があった時に、この中学校を候補に挙げたのでした。

「たろうの図書館」のスタッフを通じて、中学校へは連絡してもらっていたのですが、いざ行ってみると、図書室用に空いている教室はあったものの、「本棚がない」とのこと。このような山奥の村の学校なので当然ですが、その時、財団のラオス人スタッフのアイディアで、古い黒板と、伐ってきた竹を使って、その場で閲覧用の本棚を作り上げたことは、素晴らしい対応でした。

「今日は間に合わないから、お金を置いておくので、それで本棚を作ってね」と言って、先生にお金を渡して託しておいたとしたら、結局は何もできず、本が平積みに置かれて、図書室も使われずに終わってしまったかもしれません。学校で、支援にもらった本がただ平積みに置かれているのは、良く見る光景ですから…。

私たちが図書室の準備をしている間、先生たちは、その教室を覗きもせずに、必死で料理をしていました。ブタを一頭しめての歓迎会の準備をしていたのです。生徒たちの授業もお休みにして、みんな総出で料理をしています。既に酒も酌み交わしながら、歓迎会ムードです。





「せっかく、日本からの資金で図書室ができるのだから、そのお礼に」

との気持ちはありがたいのですが……誰一人として、「図書室ってどんなになるの？どんな本をもってきている？」などと関心も寄せてこないのには、少々がっかりしました。先生たちの宴会ムードは高まる一方で、最後には私の怒りが爆発し、

「私たちは、日本からの支援を持って、この学校の生徒たちのために図書室を作りに来たのよ。先生たちが歓迎の準備で一生懸命なのはわかるけど、生徒たちが本を読む機会を持つことが、どれだけ大切なことだか、わかってる？ 肝心の先生たちが、全然無関心だったら、私たちは今すぐもってきた本を全部、持って帰るよ」

と大声で演説？をぶちはじめたら、涙まで出てきてしまいました。

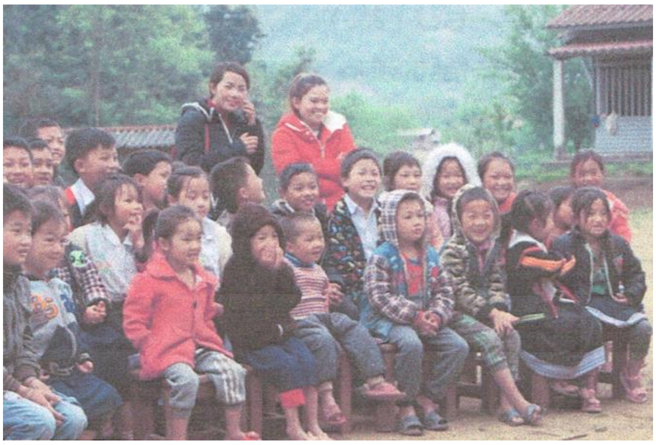
先生たちはシーンとなり、真面目な顔で図書室の贈呈が行われた後、生徒たちが早速入って来て、熱心に、本のページをめくり始めたのが、一番嬉しかったことでした。中には何時間も座りっぱなしで本を見続けていた子もいました。

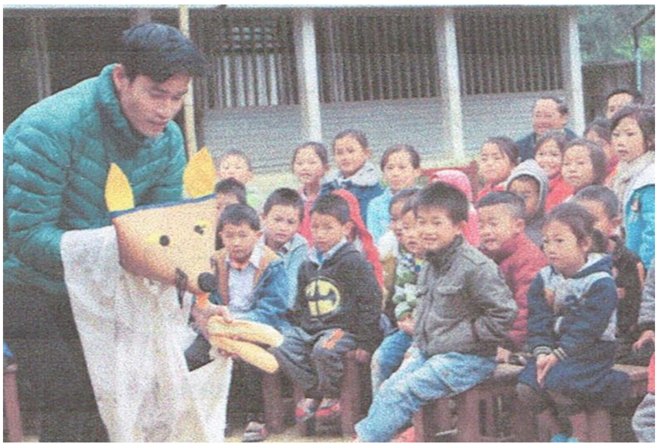
先生たち自身が、本を読んだこともなければ、図書館や図書室なんて入ったこともない人たちなのですから、こんな状況も仕方ないことか…とは思います。ラオスではまだまだ、先生でも、本や図書室の価値を分かっていない人が多いのです。

先生たちが、感謝の気持ちを込めて精一杯の歓迎をして下さったことだけは確かだったのですが……。

大切なのは、今後であり、この場所が有効に使われ、子ども達に本が使われるように、フォローしていくことが必要です。今は、「たろうの図書館」の二人のスタッフに任せています。本の登録や貸し出しのやり方なども、先生達に教えるように託しています。先日、電話で話した時には、何度か通って、先生たちは登録作業を始め、子供達は、図書室に大勢来ている…とのことでした。

ぜひ、先生にも関心を持って欲しいと思いますが、それがダメなら、この中学生の中で、将来先生になる生徒がいたら、その時には、本に関心を持った先生になって欲しい……そのためにも、子ども達がたくさんの本に触れて、考えられる世界を広げて欲しいと思いました。





【わんりぃの催し】

ボイス・トレで日本語の歌を歌おう！

身体の力を抜いて気持ちよく発声しよう！！
声は健康のバロメーター！
＊動きやすい服装でご参加ください。

● 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
● 日時：4月14日（火）10：00〜11：30
　　　　5月12日（火）13：00〜14：30
● 講師：Emme［エメ］（歌手）
● 会費：1,500円（講師謝礼・会場費）
● 定員：15名（原則として）
● 申込：☎042−735−7187（鈴木）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

【わんりぃの催し】

中国語で読む　漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！
録音機をお持ちの方はご持参ください。

● 会場：まちだ中央公民館・視聴覚室
● 日時：4月19日（日）
　　　　5月17日（日）
　　　　いずれも10：00〜11：30
● 講師：植田渥雄先生
　　　　桜美林大学名誉教授
　　　　現桜美林大学孔子学院講師
● 会費：1,500円（会場費・講師謝礼）
● 定員：20名（原則として）
● 申込：☎090−1425−0472（寺西）
　　　　Email:ukiuki65jpjp@yahoo.co.jp
　　　　（有為楠）

■4月定例会

▼4月10日(金)13:00〜
　三輪センター第三会議室

▼5月号発送は4月30日(木)10:30〜
　三輪センター第二・第三会議室
　（弁当持参）

‘わんりぃ’は、新入会をいつでも歓迎します
年会費：1800円、入会金なし
郵便局振替口座：00180-5-134011 わんりぃ
9月以降は、当年会費1100円になります。
下記へお問い合わせください。

■問合せ：044-986-4195（寺西）
‘わんりぃ’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。「文化は万里につながる」の想いから名付けました。
主としてアジア各国から来日の方々と協力して文化交流活動を続け、国や民族を超えた友好を深めて来ています。会員になりますと、
①年10回、会報誌‘わんりぃ’を送付
②‘わんりぃ’の活動の全てに参加できます。

◆わんりぃのホームページは、都合により暫くお休み致します。ネットでお楽しみ頂いていた方には申し訳ありません。ご入会いただければ、本誌を郵送させて頂きます。
◆ 町田国際交流センター(町田市民フォーラム4F)、町田生涯学習センター(109ビル6F)、中国文化センター、川崎市国際交流センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ・他でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

‘わんりぃ’252号の主な目次

寺子屋·四字成語(31)义不容辞……2
「日译诗词」(1) 江南……3
「中原旅行記」(1)……4
「漢詩の会」(38)
　羅隠の『蜂』と鄭燮の『竹石』……6
海外出張の思い出（ナイジェリア編⑪）……9
退職ジャンボ機長の回想⑤……11
川島良子（愛新覚羅顕玗）……13
開封と『清明上河図』……15
ラオス・山からだより……18
‘わんりぃ’の催し・入会案内……20